



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター  
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 人間、言語、場所: ジャック・ラカンの精神分析思想

研究課題(英文): Human Being, Language, Place : The Psychoanalytical Thought of Jacques Lacan

申請者名・所属先: 原和之・総合文化研究科

海外招聘者名: 該当なし

## 1. 研究の目的

20 世紀フランスの精神分析家ジャック・ラカンが、さまざまな学問分野への参照を通じて精神分析を捉えなおそうとする中で、「人間」と「言語」を見る見方を「場所」という観点からどのように刷新したかを明らかにしてゆく。

## 2. 研究開始当初の背景

申請者はこれまでラカンに関する思想史的研究を出発点として、西洋思想における「分析/解析」概念の歴史、最近では精神分析と性的多様性の関係について研究を進めて来たが、それらの研究の成果を背景として、精神分析の分野で展開されたラカンの仕事がより広い「思想」の文脈で持ちうるインパクトについて考えるようになり、これを「こころ」と「ことば」という一般的な概念をめぐる検討するという構想をもつに至った。

## 3. 研究の方法

ラカンの著述およびラカンが参照した諸文献を中心とした文献研究。

## 4. 研究成果

ラカンの思想が、「こころ」と「ことば」を捉えるとらえ方にもたらした革新を、「人間」、「言語」、「場所」の三つの観点から明らかにした。

ラカンと交流のあった哲学者アレクサンドル・コジューヴは、1930 年代に行われた講義において、人間に固有の欲望のあり方として「他者の欲望の欲望」を挙げ、人間を人間にする欲望という意味で、これを「人間生成的な」欲望と呼んでいた。コジューヴの議論において、この「他者の欲望の欲望」は、既に存在する他者の欲望を従え、自身の欲望を承認させる欲望という意味で理解される。これに対してラカンは、先行する彼の医学博士論文において、他者の欲望についての異なった見方を提示していた。それによれば他者が欲望するということは、決して事実ではなく、他者のこころについての知が成立するために必要な、「実際には証明不能で、自由意志に基づく同意を必要とする」ような「想定」ないし「公準」である。言い換えれば、他者が欲望するということは、その行動や想念に一貫性を与え、それらに関する知を可能にする点において望ましい事態であり、その限りでそれ自体欲望される。これは「他者の欲望の欲望」に、「他者が欲望するということ」を欲望すること」という、コジューヴとは異なった意味合いをもたらす見方である。こうしたラカンの「他者の欲望の欲望」の概念が核となる議論として、われわれは 1950 年代にラカンが行ったエディプス・コンプレックスの再解釈、いわゆる「欲望の弁証法」をめぐる議論をとりあげ、そこでそうした欲望が人間の心的発達において鍵となる契機として位置づけられ、コジューヴとは異なった意味において「人間生成的な」欲望となっていることを確認した(5. [その他]1)。

さて他者の「こころ」を知る、ということは、その「こころ」に一貫性を与えている欲望を知ることである。そ



して他者の欲望を知るということは、さしあたり他者が何を欲望するかを知ることである。ラカンが「ことば」に寄せる関心は、こうした誰かが欲望する対象を知ろうとする、他者の「ところ」に対する知の関係と、誰かが言うことを聴き取り、その「言わんとすること」を知ろうとする「聴取」の関係との相同性に由来すると考えることができる。ただし「ことば」をそうした拡張を許すものとして捉えるためには、そもそも言語を語る語り方が二重の仕方で更新される必要があった。すなわち言語の伝統的な学としての「文法」に代わって 20 世紀の初めに「一般言語学」が登場し、さらにそれが主として言語の形式的な側面に取り組んだ最初の時期をへて、1950 年前後にあらためて「意味」の問題へと取り組むようになる必要があった。言語学の領域におけるこうした刷新に加え、1950 年代にフランスにもたらされた哲学、数学分野での新たな知見、ハイデガーの後期哲学とゲーム理論を手がかりとして、ラカンは精神分析の分野で問題となるような「ことば」の捉え方を、一つの言語理論の形に昇華する。「シニフィアン連鎖」と「グラフ」という形で定式化されたこの理論のなかで、言語はもはや主体が用いる道具ではなく、主体がそれとの関わりで位置づけられるような、ある独自の構造をもった「場所」として規定されるようになった(5. [その他]2)。

さらにこの主体の「場所」がそのものとして主題化される筋道の一つとして、われわれは 1960 年代にラカンが行ったパスカルの『パンセ』中のいわゆる「賭」の断章の読解に注目した。パスカルの没後 300 周年にやや先立つ時期から、フランスではパスカル研究が改めて注目されつつあったが、そうした同時代の動向を背景に、ラカンはこの断章について独自の読解を提示する。われわれは「賭」の断章についての同時代の代表的な哲学的読解である、リュシアン・ゴールドマンの『隠れたる神』における議論との対比を試み、また塩川徹也氏の『パスカル考』における議論を手がかりとしつつ、ラカンがこの断章のよく知られた一節「きみはもう乗船してしまっている」とそう呼びかけられた「自由思想家」の躊躇のうちに、上述の「グラフ」によって表現される言語的な「場所」との関わりでみた主体の位置の問題を孕んだ性格、その「内」と「外」を単純に割り切ることのできない、独自の「トポロジー」を要請するような性格の表現を看取したのではないかとする仮説を提示し、その観点からラカンが 1969 年のセミナーで展開した一連の「パスカルの賭」をめぐる議論を読むことを試みた(5. [雑誌論文]1,2,3)。



## 5. 主な発表論文等

### 〔図書〕

原和之, 精神分析の「幼年期の終わり」、藤山直樹・十川幸司編『精神分析のゆくえ: 臨床知と人文知の闘』(金剛出版、2022年11月刊行予定)

### 〔雑誌論文〕

1. 原和之, 悲劇・弁証法・トポロジー——ラカンによる「パスカルの賭」(上), 『思想』, 第 1175 号, 岩波書店, 2022 年 3 月, pp. 102-122.
2. 原和之, 悲劇・弁証法・トポロジー——ラカンによる「パスカルの賭」(中), 『思想』, 第 1178 号, 岩波書店, 2022 年 6 月, pp. 59-84.
3. 原和之, 悲劇・弁証法・トポロジー——ラカンによる「パスカルの賭」(下), 『思想』, 第 1179 号, 岩波書店, 2022 年 7 月, pp. 83-110.

### 〔学会発表〕

なし

### 〔その他〕

1. 原和之, ジャック・ラカンによる「人間」, 第 62 回 HMC オープンセミナー, 東京大学ヒューマニティーズセンター, オンライン, 2022.4.15.
2. 原和之, ジャック・ラカンによる「言語」, 第 83 回 HMC オープンセミナー, 東京大学ヒューマニティーズセンター, オンライン, 2022.9.30.